Semantic Extension of Adverbs Expressing Continuity : From Cognitive Linguistic and Typological Perspectives

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/3986

継続相を表す副詞の意味拡張パターンの研究：認知言語学・言語類型論の観点から

守　屋　哲　治

Semantic Extension of Adverbs Expressing Continuity : From Cognitive Linguistic and Typological Perspectives

Tetsuharu MORIYA

1．はじめに

英語の副詞 still は継続相を表す副詞であるが、その「継続」という概念や、この語の持つ語用論的な意味特徴をどのようにとらえるのかといったことが先行研究で問題とされてきた。さらに、一見同じような振る舞いを示す他の言語の副詞の中には、日本語の「まだ」のように英語の still とは一部振る舞い方が異なるものがあることがわかっている(Moriya1988)。一方、still や「まだ」などの「継続」を表す副詞は時間的意味を起点として、さまざまな意味拡張を見せることが多いが、その拡張パターンは必ずしも一様とは言えない。

以上のような背景を踏まえて、本稿ではまず、still の主要な特徴を振り返った上で、主として認知言語学および言語類型論的立場から、「継続相」を表す still の意味的特徴および意味拡張パターンの特徴について、日本語と対比しながら論じていく。その際、ドイツ語と韓国語の副詞のデータも意味的特徴を探る一助として用いる。

本稿の構成は以下のとおりである。まず 2 節では still の主な特徴を他の副詞、特に yet との関係から考察する。3 節では日本語の「まだ」の特徴を、主として「もう」との対比から捉える。4 節で still と「まだ」の類似点・相違点をドイツ語・韓国語のデータも参考にしながら、認知言語学的・言語類型論的立場から議論し、5 節でまとめを行う。

2．still の意味

2．1．still の基本的意味

副詞 still の持つ最も基本的な意味は、(1)の例に示されるような、時間的な継続を示す用法である。なお、用例は特に断りのあるもの以外は British National Corpus（以下、BNC）から採っており、例文の後の記号はコーパスの分類記号を示す。

(1) a. How come he's *still* in the band? (A6E)
　　b. Salmon is *still* the rich man's herring. (A3C)

(1a,b)のいずれも、still は現時点以前の状況と現在の状況とが同じであることを断定する働きをしている。(1)に見られるような still をこのように分析すること自体は、多くの辞書の記述および先行研究などでも一般的に行われている。例えば、Longman Dictionary of Contemporary English の第 3 版では、still のこの用法を(2)のように定義している：

(2) Up to a particular point in time and continuing at that moment.

また、Horn(1970)では、前提(presupposition)と断

平成 18 年 10 月 2 日受理

定(assertion)という概念を用いて基本的用法のstillの意味を(3)のように記述している：

(3) Presupposition: $\exists t_i < t_0(t_i(S))$
Assertion: $t_0(S)$

(3)が表しているのは、発話時点 t_0 に先立つ時点 t_i においてある状況 S が存在するという前提のもとで、その同じ状況 S が発話時点 t_0 においてもあてはまるという断定をしている、ということである。

ただし、(2)あるいは(3)の条件を満たすような状況を表す文にすべて still が用いられるわけではない。ある状況がすでに変化していると期待あるいは予測していたにもかかわらず、その状況が依然として続いている、という語用論的な条件が伴っている場合が多い。Macmillan English Dictionary は(4)のように"surprising"という語を定義の中に含めてこの語用論的な意味合いを表し、(5)のような文で具体的に例示している：

(4) used for saying that a situation continues to exist up to and including a particular time, especially when this seems surprising.

(5) a. We were *still* cleaning the house when the guests started to arrive.
b. The car's doors were locked but the motor was *still* running.

(5a)では、従属節において清掃が終了していることが本来期待されている時点であることが示されており、(5b)では等位節の前半が、すでにモーターが停止しているべき時点であることを示唆している。

このような語用論的条件を読み取りやすい用例が(6)である：

(6) a. Age discrimination is *still* a major problem in the workplace (B01)
b. Though mercy killing is *still* officially illegal, the law turns a blind eye to the 2.4 percent of Dutch deaths which are accounted for by it.　(CH1)

(6a)では age discrimination が解消されていることが期待される現代における状況を表しており、(6b)では少なくともオランダにおいて mercy killing（安楽死）を非合法的としない流れが出てきていることを背景として still が用いられていると考えられる。

基本的用法の still の意味をまとめると、ある事態の「継続」を示すが、その背後にその事態が変化することへの「期待」あるいは「予測」が存在する、と言うことができる。

2．2．「継続」から「未達成」へ

Still が継続相を表すためには、still によって修飾されている命題内容が明らかに継続性を内包しているものである必要がある。つまり、He is still alive.という文においては、He is alive.で表されている命題内容が明らかに継続性を持つことによって still がその継続相の意味を前景化(foregrounding)していると言うことができる。

しかし、一見時間的継続に関係すると思われる still の用例の中には、必ずしも修飾される命題内容が上でみたような意味での継続性を持ちうるものとは考えにくいものもある：

(7) a. Sparkling wine is *still* at the fledgling stage, but developments are taking place.(A7F)
b. There is obviously an ambitious streak in me but I do realize that I am *still* very young and inexperienced. (ADR)

(7a)の at the fledgling stage は「駆け出しの段階」という状態を表しているが、これは通例、物事が発展していく一段階として捉えられるべきものであって、「駆け出しの段階」自体が継続していくものとは捉えられない。また、young とい

うのも人間が生まれてから死んでいくまでのある一過程であり、それ自体が alive と同じように継続可能な事態とは捉えられない。

(7)のようなケースで still が用いられた場合、その表す意味の重点は「継続」そのものよりも、その背後に本来あった語用論的な「期待」あるいは「予測」される変化の「未達成」という点に移っていると考えられる。すなわち、(7a)では sparkling wine が完成段階に達するまでにはまだ質的あるいは時間的な余地があるということ、(7b)では成人としてのきちんとした判断ができる段階にはない、ということを表していると見ていいだろう。

(6) のようなケースと (7) のようなケースは必ずしもはっきりと分けられるとは限らない。用いられる述語の種類や文脈によって「継続」に重点が置かれる場合もあれば「未達成」に重点が置かれる場合もあり得る。さらに(8)のように「義務を課された状態の継続」ととることもできるし、「果たすべき義務の未達成」ととっても実質的に大きな差が出ないような場合もある：

(8) Washington had *still* to respond when the coup petered out. (A3D)

ただ、「未達成」の意味が中心になる(9)のような構文も存在することから、「継続」と「未達成」の意味は分けておく必要があるだろう：

(9) They see only the work that is *still* to be done. (B7H)

この構文は「予定」を表す be+to 不定詞の構文にさらに still が加わったもので、構文全体として「未達成」の意味を表すと考えられる。なお、この構文との類似性から存在が認可されていると考えられるのが(10)の例文に示されるような構文である：

(10) Such are the questions which remain to be addressed. (CFE)

(10)では be と still の意味を合わせ持った動詞 remain が to 不定詞と結びつくことによって(9)と同じような意味を表す構文になっている。To 不定詞の動詞句が受動態になることが多い点など両者の構文は共通点が多い。なお、Ross(1977)が(10)に示した構文の詳しい特徴を挙げており、守屋(1991)ではこの構文がどのような認知的なメカニズムから生じたものかについて考察を加えている。

2．3．逆接的意味への拡張

前節では、still の持つ基本的意味である「継続」と語用論的意味が強化されたことによって生じると考えられる「未達成」の意味について見た。[1] この二つの意味は今までに挙げた例で見たとおり、一体化しているケースも見られるが、本節で取り上げる「逆接」と「継続」との違いはよりはっきりとしてくる。

Still が「逆接」の意味を担っていると考えられる例は(11)のようなものである：

(11) a. Surely somebody would stand up and let her sit down ? But the train started off again, and she nearly lost her balance; and *still* nobody moved.(BMU)

b. Sweat trickled down his sides in spite of the cold. His clothes were heavy and awkward. *Still* the road seemed to stretch onwards endlessly. (GUF)

still の「継続」の意味には、多くの場合、本来ならばその継続が断ち切られ、状況が変化するという「予測」あるいは「期待」が込められていることを先にみたが、そのような「予測」あるいは「期待」からその継続状況を見ると、期待される変化と継続する状況との間に両立不可能な関係が存在することになる。すなわち

still が単なる「継続」の意味から「変化が期待されているにもかかわらず状況が継続している」というようなより主観的意味へと変化しているのである。

このような意味の主観化と連動して、still が述語を修飾する副詞の機能から、(11b)の例で明らかなように、接続詞的な機能を担うように変化している。従って、still の「継続」から「逆接」への変化は Traugott(1988)や Traugott and Dasher(2005)などが論じている文法化の変化の特徴である主観化(subjectification)に合致していると考えられる。

2．4．付加的用法への拡張

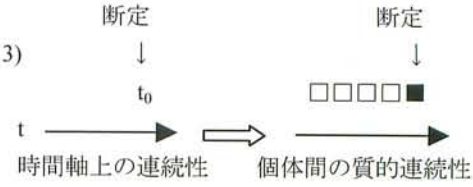
Still には今まで見てきた用法の他に、比較級や another などの語を強める用法がある：

(12)a. The economy is *still* more important than psychology.　(ANT)

b. Claudia is resigned to the fact it might be *still* another six years before it puts on a show.　(ACY)

この用法では「継続」の概念が時間的領域から、異なる個体間の質的連続性に拡張していると考えられる。(12a)の文では先行文において psychology の重要性が語られているが、この文においてその psychology よりもさらに一層重要なものが economy であると述べている。これは、先行文の終わりまでは psychology が重要性の尺度の極大に位置していたものの、この文においてはその尺度がさらに延長され、その延長された極大に economy が位置していることを表すと考えると、「継続」の意味の拡張として捉えられる。両者の意味を図式化して比較すると以下のようになる：

(13)



Michaelis(1996)では、共時的な拡張と通時的拡張は基本的に関連ないという主張のもとに *still* が持つ複数の意味は、基本的意味からの拡張ではなく、共通のスキーマによって特徴づけることが可能であるという主張をしている。しかし共通のスキーマの存在が必ずしも各意味の間の意味拡張関係を排除することにはならないため、共時的知識構造の中に(13)で示したような、あるイメージ・スキーマを共有しつつもメタファー的な拡張関係を認めることは Michaelis(1996)の立場とも基本的には矛盾しないと考えられる。

2．5．歴史的な拡張との対応

ここまで述べてきた still の複数の意味関係記述は、共時的な観点からのものであり、通時的な発達とは別個に仮定したものである。共時的な意味の拡張関係と通時的な意味の拡張は必ずしも対応するわけではない。しかし、still の通時的発達は、本論文で対象としている意味の範囲に限っていえば共時的な拡張の道筋とほぼ並行している。Still はもともと形容詞で、動きのなさ、それに伴う静けさなどを形容する語であった。この意味は現代英語にも例えば still water などの表現の中に見られる。その後、stand, sit など補語を従える動詞の後に使用された時、すなわち stand still や sit still などの表現において形容詞と副詞の混同が起きて、副詞的用法へと拡張されたと考えられている。

そのような経緯から、still の意味は、物理的な「静止」という概念が副詞になって時間的な「継続」の概念へと拡張していったものと考えられる。Oxford English Dictionary（以下 OED）において stand still や sit still などの初出年代がお

およそ紀元1000年頃であるのに対し、「継続」のstillは、現在は廃用になった「常に」という意味を経て16世紀ごろから用いられている。また、「未達成」の意味は17世紀の用例が初出であり、「逆接」や「付加」の用法は18世紀ごろから使われ出している。以上の通時的な拡張を図式化すると以下のようになる：

(14) 「継続」→「未達成」→「逆接」
　　→「付加」

「継続」から「未達成」への変化は、一つの意味構造の中でどこの部分に焦点が当てられるかという点の変化なのでメトニミー的な意味拡張と考えられ、「未達成」から「逆接」や「付加」への拡張は、意味領域そのものの変換を伴うものなのでメタファー的拡張であると考えられる。

2．6．Yetとの対比

Stillと類似した用法を持つ副詞にyetがある。Yetの基本的意味は「非実現」、すなわち起こることが期待、あるいは予測される事柄がまだ起こっていないことを表す：

(15) a. The tourists have not started coming *yet*.(A1V)
　　b. My body hasn't adjusted to the time-lag *yet*. (BMW)

「非実現」と「未達成」はお互いに含意関係にあり、密接に関係しているため、以下では特に区別せず「未達成」として取り扱うが、この二つの意味は全く同一なわけではない。先にstillの意味のひとつとして挙げた「未達成」は、期待される変化が起こるまでにはかなり余地が残されているという点に意味の焦点が当てられているが、yetの「非実現」は単に期待された変化が起こっていないというだけであり、その期待される変化が起こるまでの余地には焦点が当てられていないという点で違いがある。

この意味のyetは、よく知られているように現代英語では否定文で用いられるが、もともとは肯定文でも用いられていた。(16)はOEDからの用例である：

(16) You know you look ill *yet*, very ill.

この用例は1888年の文献から採集されたものであるが、現代英語ではyetではなくstillが用いられるところである。ここで注目に値するのはこの用法のyetの初出年代である。OEDによればこの用法の初出年代は897年頃であり、stillよりも数百年は先行していることになる。すなわち、yetは現代英語のstillの持つような「継続」の意味を持っていて、肯定文だけでなく否定の作用域内でも用いられていたのが、stillによって肯定の用法が侵食され、否定の作用域内での用法が残存し、「未達成」をもっぱら担うようになったと考えられる。

拡張的な部分においてstillとyetが同じ意味を持っているのは両者がスキーマレベルで「継続」に関わる意味構造を共有していると考えると、それほど不思議なことではなくなる：

(17) In all the ballets just mentioned not one makes use of the purely classical technique with its severe class-room discipline. *Yet* this is the firm basis from which the choreographers built their framework of steps, poses and gestures. (A12)

(18) Only a minority of people move in retirement—most stay where they have always lived. The comfort of their home can be especially important if they spend a lot of time there. *Yet* older people tend to occupy the oldest, poorest housing and are more likely to be private tenants than other groups. (A10)

(19) The West German electorate lacks confidence in Chancellor Kohl and his team, but has *yet* to

be convinced that the SPD, with whatever future coalition partner it chooses, will do much better. (A1V)

(17)は逆接、(18)は比較級の強め、(19)は「予定」を表す be+to 不定詞に付随して「未達成」を表す意味で用いられており、still とどれも交換可能であることが見てとれる。このことから、yet も still と同様にもともとの基本的意味は「継続」であり、基本的意味が still と同じように拡張することによって多義の構造が生まれたと考えられる。現代英語において yet が still と基本的意味を異にするように見えるのは、yet が still によって否定の作用域内へと追いやられたためである。

ただし、still と yet が基本的意味以外の多くを共有しているといってもその拡張パターンが全く同一というわけではない。例えば OED から採った(20)のような例では yet を still に置き換えることはおそらくできないであろう：

(20) 'Blanch' is to consist of five thousand lines, and only eleven hundred are *yet* written.

この例の yet は so far と置き換え可能な意味を持ち語用論的には「未達成」のニュアンスを持つ点で still と類似した側面を持っているとはいえるが still と置き換えができないことから全く同じ意味を表しているとはいえない。

また、両者が持っているとする「継続」の意味ですら全く同じとは考えられない。それは、現代英語においてもなお yet が肯定文で用いられる環境がいくつか残っており、そのような環境では意味的にコントラストが生じる場合があるからである：

(21) a. You may *yet* buy the house.
　　b. You may *still* buy the house.
(22) a. I have *yet* to see a generous Scotsman.
　　b. I *still* have to see a generous Scotsman.
(23) a. This is the best essay *yet*.
　　b. This is *still* the best essay.

(21)から(23)はいずれも König and Traugott (1982)が挙げている用例で(21a)は may が許可の意味しか持ち得ないのに対し、(21b)では may が許可の意味と可能性の意味の両方を持ちうる。(22a)では不定名詞句 a generous Scotsman は非指示的な解釈しか許されない。すなわち、ある特定の「寛大なスコットランド人」を念頭においているという解釈はできない。それに対して(22b)は指示的な解釈、すなわちある特定の人物の存在を前提にした解釈しかできない。(23a)では発話者はほかに best essay が出てくる期待を抱いているのに対して、(23b)ではそのような期待は存在しない。Still と yet の持つ「継続」の意味のどこまでが並行的でどこから違いが生じているのかを検討することはそれ自体興味深い問題であるが、それは今後の課題としたい。[2]

この章では still の意味的特徴を、基本的意味からの拡張パターンという視点から yet と対比しつつ論じた。次章では、「まだ」の意味的特徴を見た上で still との類似点・相違点などを考察していきたい。

3．「まだ」の意味

3．1．「まだ」の基本的意味

「まだ」が still と異なる大きな点は否定と共起し、その作用域の中に入ることができるという点である。Still は否定と共起する場合も常に否定の作用域外であり、その点で yet と相補分布をなすが、「まだ」は肯定文・否定文、いずれの文でも用いられ得る。

語源的には「まだ」は名詞「いま」と副助詞「だに」が結びついた「いまだに（未だに）」が縮約されたものと考えられている。「だに」は程度や状態の低いものについてより程度の高いものの存在を示唆する語用論的な意味を含んだ副助詞であることから、「まだ」にもそのような語用論的意味が残っていると考えら

れる。

以上の点から、「まだ」の基本的意味は「継続」ではなく「未達成」であると考えられる。「未達成」の意味が用いられる最も典型的な構文は yet 同様に否定文であるが、肯定文でも期待した状態・変化に達しない状況は述語の選択によって表せる：

(24) a. 私はこれから先生と懇意になった。しかし先生がどこにいるかはまだ知らなかった。
b. あなたは死という事実をまだ真面目に考えた事がありませんね。
c. 吐気さえ来なければまだ大丈夫ですよ。
d. もう帰るのかい、まだ早いじゃないか。
（夏目漱石『こころ』）

(24c,d)では述部は否定ではないが、「大丈夫だ」というのが文脈上「病気になる段階にはない」ということを意味しており、「早い」は「帰るべき段階に達していない」という話し手の考えを示している。

「未達成」を基本的意味とし、否定文における用法を典型的とする見方は飛田・浅田(1994:497-8)にも見られる。

3．2．「継続」への拡張

「未達成」という基本的意味から、期待あるいは予測される変化が起こらない状態が継続しているという含意のほうに重点がシフトすることによって「継続」の意味が生じると考えられる。

(25) a. それぐらいのことで今日もまだ腹を立てているとは思われない。
（坂口安吾『街はふるさと』）
b. 源さん、わたしゃ、お嫁入りのときの姿が、まだ眼前に散らついている。
（夏目漱石『草枕』）

(25)の例はいずれも、「継続」の still の例と同じように、「まだ」を取り除いた「腹を立てている」や「眼前にちらついている」といった述部に、「ている」が使われていることからもわかるように命題内容自体が継続的な状況を表している。また、still の場合と同様、「未達成」と「継続」はそれほどはっきりと分離できるものではなく両者が併存していると感じられることが多くあり、その割合は状況によって異なる。(25a)の場合は、腹を立てるという感情はそれほど長続きしないという期待を背景に発せられていると考えられるので「未達成」のニュアンスは記憶の継続を表している(25b)よりも強く感じられる。

3．3．付加的用法への拡張

英語の still 同様、「まだ」も程度がより高いもの、あるいは今までに存在が断定されていた以外のものの存在を示唆する用法が存在する。この用法は still と同じように「継続」からの拡張と考えられる。

(26) a. あのほかにまだ年寄の奥様がいるのかい。
b. まだほかに何かするのだろう。
（夏目漱石『草枕』）

(26a)では先行文脈で「若い奥様」が存在することが示された上で、さらに「年寄りの奥様」が存在していることが述べられている。(26b)もいままで述べてきたことの延長線上に別のことが付け加わることを示している。また、「これからまだ寒くなる」というような文では、現在の寒さを基準として、それをさらに上回る寒い状態になることを述べている。

これらの意味はいずれも「継続」のイメージ・スキーマにおける時間軸が、「性質」もしくはある性質の違いによって直線的に配列された個体の集合に置き換えられていると考えられる。すなわち、「継続」から「付加的用法」への拡張はメタファー的拡張の典型的な例と

考えられる。この拡張パターンがstillの場合にも「まだ」の場合にも見られることは間違いないが、現象面で異なる点がある。それは、stillがanotherや比較級、そして具体的な数値を修飾することができたのに対し、「まだ」は上でみたように英語で言えばotherにあたるような概念を示す名詞、「まだ寒くなる」のように性質の比較を表す形容詞には用いられるものの、具体的な数値を修飾する場合には用いることができない。そのような場合には「まだ」ではなく「もう」が用いられる。

(27) もう十五丁行くと茶屋がありますよ。
（夏目漱石『草枕』）

日本語ではこのような場合になぜ「まだ」が使えず「もう」が使えるのか、という問題は、今後、「まだ」と「もう」がどのような意味的対立をなすのかということを吟味した上で検討すべき課題である。[3]

いままで見てきた「まだ」の拡張パターンを図示すると以下のようになる：

(28)　「未達成」→「継続」→「付加」

Stillとの違いは「未達成」が元となって「継続」の意味が生じている点と、「逆接」の意味が存在しない点である。一番目の点については次節で考察する。二番目の点に関しては、「逆接」が「未達成」の意味からの語用論的強化によって生じたと考えられるため、「継続」の意味からは直接つながっていないのだと思われる。「未達成」から「継続」への変化はstillと逆方向ではあるがやはりメトニミー的拡張、そして「継続」から「付加」はメタファー的拡張とかんがえられる。

4．出発点の問題

Stillと「まだ」では、拡張のパターンは類似しているものの、基本的意味が「継続」なのか「未達成」なのかという点が異なり、それに応じて拡張パターンにも違いが見られることがわかった。本節ではそもそも基本的意味が異なるのはなぜなのか、という点を取り上げて考察する。

Moriya and Horie(2003)では英語のalready, still, yet, anymoreそして日本語の「まだ」、「もう」の用法に食い違いがあることを取り上げてその原因について考察した：

(29) a. I *already* like him. [‘I have by this time come to like him.’]
b. I *still* like him. [‘ I continue to like him.’]
c. *He can't *already* drive.
d. ?He can't *still* drive.
e. I haven't spoken to him *yet*.
f. I do not see him *anymore*.
(a-d:Quirk et al. (1985:580))

(29a-d)に見られるように、already, stillは通例否定の作用域内に起こることはできず、否定の作用域内に起こる場合には(29e-f)のようなyet, anymoreを用いる。Already, anymoreに共通する意味を「変化」、still , yetに共有する意味を「継続」とした場合、その関係は(30)のように表せる：

(30)

	「継続」	「変化」
肯定文	still	already
否定文	yet	anymore

一方、日本語の場合は「まだ」、「もう」が肯定文、否定文のいずれにも用いられるため、(31)に示すような関係になる。

(31)

	「継続」	「変化」
肯定文	まだ	もう
否定文	まだ	もう

時間関係を表す副詞は、命題の内容を修飾する

様態副詞などとは異なり、ある時点における命題内容をほかの時点の命題内容と比較した上で、その異動を評価するという認知操作を表している点でより主観的な機能を持っているといえる。このような主観的な機能を持つ副詞は通例、より客観的な内容を表す語から、文法化のプロセスを経て生じる。(30)や(31)にみられる振る舞いの違いはその文法化のプロセスの違いから生じると考えられる。より具体的には、時間関係の副詞の元となる語の性質の違いが影響すると見て、Moriya and Horie(2003)では概略以下のような仮説を立てた：

(32) 元になる語が具体的に観察可能な状況を描写する性質を持つ時間関係副詞は否定の作用域に入りにくく、元になる語が時間・量などの抽象的概念を表すものである場合には否定の作用域に入ることができる。

Still は語源的には静止状態を表す形容詞であったことは先に指摘したが、already は all+ready が縮約されて生まれた形であり、ready は観察可能な状況と考えられる。それにたいして「いま＋だに」から生じた「まだ」、そして時をあらわす「ま」から生じたと考えられる「もう」のいずれも時間的な概念を表す語を出発点としており、この違いが振る舞いの違いをもたらしているとした。

この制約は、文法化のプロセスで元の語の性質が文法化語も残存する現象(persistence)のひとつと考えており、否定が表す非現実相(irrealis)と具体的状況描写という現実相(realis)との相反が動機付けとなると推定した。Moriya and Horie(2003)では、この仮説の妥当性を検証するためにドイツ語と韓国語の時間関係副詞を調査した。

(33) a. Sie wohnt *noch* hier.
she lives still here
"She still lives here."
b. Er ist noch nicht zurück.
he is still Neg back
"He is not back yet."
c. Er hat schon gegessen.
he has already eaten
"He has already eaten."
d. Ich bin nicht mehr jung.
I am Neg more young
"I am not young anymore."[4]

ドイツ語では noch が日本語の「まだ」に相当し、肯定文においても否定の作用域内にも生じることができる。それに対して「変化」を表す語は肯定文では schon、否定の作用域内では mehr が用いられている。この関係を整理すると(34)のようになる：

(34)

	「継続」	「変化」
肯定文	noch	schon
否定文	noch	mehr

体系の構成自体は英語の場合とも日本語の場合とも異なる。しかし、否定の作用域内に生じることのできる noch が「いま」という時を意味する語 nu に由来しており、また、mehr が more にあたる量を表す概念である一方で、schon は「美しい」という具体的状況を表す schön から由来していることからドイツ語の場合も、英語や日本語と同様に(32)の原理とは矛盾しない。[5]

次に韓国語の時間関係副詞を取り上げる。韓国語の場合、「継続」は acik(to)で表される。ここで to は日本語の「も」にあたる助詞であり、付加される場合もされない場合もありうる：[6]

(35) a. *Acikto* pi- ka o-ko issta
still rain-Nom come-Ger exist:Decl
"It is still raining."
b. *Acik* an po-yo
still not see-Pol

"(I) cannot see yet."

(35)の例文から分かる通り、acik(to)は肯定文でも否定の作用域内でも生じうる。これに対して「変化」を表す時間関係副詞は数種類存在していて、それぞれに分布が異なる。

(36) a. Kukes-un *imi* kkuthna-ss-ta
That thing-Top already end-Past-Decl
"That has already ended."
b. *Pelsse* yeltwu-si ta
already twelve o'clock Cop: Decl
"It's already twelve o'clock."

「変化」を示す時間関係副詞は imi と pelsse があり、インフォーマントによると、pelsse は話し手の驚きの感覚がより強く表れるという。しかし、いずれの副詞も否定の作用域には生じにくい：

(37) a. Ku-nun(**pelsse/?imi)* yeki-ey salci
he-Top already here-Loc live

anh–nun-ta
Neg-Pres-Decl
"He doesn't live here anymore."

b.Ce-nun catongcha-lul (**pelsse/*imi)*
I-Top car-Acc already

wuncenha-ci anh-nun-ta
drive Neg-Pres-Decl
"I don't drive a car anymore."

Imi の語源についてはいまのところよく分かっていないが、pelsse については「速い」を意味する ppaluta から派生していることが分かっている。従って、pelsse は(32)の原則に一致しており、imi は語源的には時間や数量などの概念を表した語ではなく、現象を描写する働きを持つ語から由来したことを予測することになる。それに対して、否定の作用域では、icey, teisang, tenun などが用いられるが、icey は「今」を表す名詞に由来していると考えられ、teisang および tenun は量に関する表現に由来している。以上を整理すると(38)のようになる：

(38)

	「継続」	「変化」
肯定文	acik(to)	pelsse, imi
否定文	acik(to)	icey, teisang, tenun

今までに見た、英語、日本語、ドイツ語、韓国語いずれの時間関係副詞の体系もそれぞれに異なっているが、その使い分けの原理である(32)は共通していることがわかる。ただし imi は語源が不明であり、英語の yet もドイツ語の yetzt などとの関係が証明されてはいないため、完全に(32)の有効性がこれらの言語に関して示されたわけではなく、すべての言語に普遍的に働く要因であると考えることも非現実的であるかもしれない。しかし、少なくとも各言語において副詞の体系を形成する動機付けのひとつとして働いていると考えることはできよう。

さて、以上の点をふまえると、英語の still が「継続」の基本的意味を持ち、日本語の「まだ」が「未達成」の基本的意味を持つのは(32)の原理が関連していると考えられる。ただし、(32)のような原理が原因となって基本的意味の差が生じるのか、それとも出発点となる意味領域の違いが基本的意味の違いを生じ、それが結果的に(32)のような原理（その場合には観察的一般化ということになる）につながるのかという因果関係は今のところ定かではない。ただ、いずれにせよ出発点の意味領域、すなわち元となる語がどのような意味領域にある語か、ということと、時間関係副詞の基本的意味が何になるのか、ということが密接に関連しているということは言えそうである。

5．まとめ

本稿では、まず英語副詞 still の意味拡張パターンと日本語副詞「まだ」の基本的意味、および意味拡張のパターンを記述的に分析した。その上で、両者の意味拡張パターンは継続を示す時間軸から量的・質的な連続性を示す尺度へのメタファー的拡張が見られる点は共通するが、基本的意味が違うことによって拡張パターンが異なることを見た。さらに、ドイツ語、韓国語の時間関係副詞体系との対比から、元となる語が現象描写的な意味から由来するのか、あるいは時間や量といった抽象的な意味から由来するのかといった点が、副詞としての基本的意味の違いに関連する可能性があることを指摘した。

語彙的要素から文法的要素へと語彙が変化するプロセスである文法化への関心が認知言語学の中で高まっている。ただ、ともすると文法化のプロセスを人間の認知機構の要因で動機づけようとするあまり、どの言語にも共通する普遍的な要因というものを追い求めがちになり、個別言語の状況の違いが意味変化のプロセスにどのように影響しているのか、という視点が欠けてしまう場合がよく見られる。本稿はそのような背景の中で、文法化を含む言語変化の個別言語的要因と普遍的要因との関係を探るひとつのケーススタディとして位置づけられる。今回取り上げた現象に関してより厳密な分析およびより多くの他言語データの収集・分析が必要なのは言うまでもないが、今述べたような視点から今後も様々な言語現象の認知言語学的、かつ言語類型論的な分析を進めて行きたいと考えている。

謝　辞

本研究は平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究(C) 課題番号 16520234）の補助を一部受けて行われています。

注　釈

1. 語用論的意味の強化が文法化のプロセスにおいて果たす役割については Traugott(1988)を参照。
2. still と yet の歴史的発達を考慮にいれた類似点・相違点の考察は König and Traugott(1982)が詳しく行っており、still の基本的意味を continuation without boundary とし、yet の基本的意味を continuation up to an imminent boundary/change と定義している。
3. Moriya(1988)では、「まだ」、「もう」の役割分担について疑問文などでの用法も含めて吟味した上で、両者がともに用いられうるような文脈では「もう」のほうが選ばれる傾向にあることを指摘した。それがどのような理論的意味を持つのかも検討課題となる。
4. 本稿で用いる略号の意味は以下の通り： Acc: Accusative, Cop: Copula, Decl: Declarative, Ger: Gerund, Loc: Locative, Neg: Negation, Nom: Nominative, Pol: Politeness, Pres: Present, Top: Topic
5. ここに紹介したドイツ語の語源説明は国松(1998)による。
6. 本稿では韓国語のローマ字表記については Yale 式を採用している。そのため、ローマ字表記が必ずしも実際の発音を反映している訳ではない。

参考文献

Horn, Laurence. 1970. "Ain't it hard (anymore)?" *Papers from Sitth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 318－327, Chicago: Chicago Linguistic Society.

König, Ekkenhard and Elizabeth Traugott. 1982. "Divergence and Apparent Convergence of *Yet* and *Still*." *Proceedings of the Eighth Annual Meeting of Berkeley Linguistic Society*, 170-79. Berkeley: Berkeley Linguistic Society.

国松孝二編. 1998. 『独和大辞典第二版』東京：小学館

Michaelis, Laura A. 1996. "Cross－World Continuity and the Polysemy of Adverbial *still*." In Gilles Fauconnier and Eve Sweetser eds. *Spaces, Worlds, and Grammar*. Chicago: The University of Chicago Press, 179－226.

Moriya, Tetsuharu. 1988. "*Mada, Mō* vs. *Already, Yet, Still, Anymore*: Comparison of Time Adverbs in Japanese and English." *Sophia Linguistica* 26, 101－111.

守屋哲治. 1991. 「英語継続相動詞の認知論的研究」『北陸大学紀要』第 15 号, 131－142.

Moriya, Tetsuharu and Kaoru Horie. 2003. "Constraints on Grammaticalization: A Case Study of Time-relationship Adverbs." In Shuji Chiba et al. eds. *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita* 435-446, Tokyo: Kaitakusha.

Quirk, Randolph et al. eds. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Ross, John R. "Remnants." *Studies in Language* 1, 127-138.

Traugott, Elizabeth C. 1988. "Pragmatic Strengthening and Grammaticalization." *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of Berkeley Linguistic Society*, 406-16. Berkeley: Berkeley Linguistic Society.

Traugott, Elizabeth C. and Richard B.Dasher. 2005. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.

飛田良文・浅田秀子. 1994. 『現代副詞用法辞典』東京：東京堂出版